

# オルタナティブの風

文●田坂広志

text = Hiroshi TASAKA

8

## 多重人格のマネジメント

どうすれば、我々の中に眠る才能が開花するのか。

実は、ある「才能」が開花するとは、我々の中から、その才能に見合った「人格」が現れてくることである。

実際、世の中では、次のような言葉がよく使われる。「彼は、性格的に営業には向いていない」「彼女の几帳面な性格は、経理向きだ」「彼も、営業マンらしい面構えになってきた」

このように、我々は、一人の人間の「能力」を論じるとき、「能力」と「性格」を一对のものとして論じている。「才能」と「人格」を表裏一体のものとして考えている。

されば、一つの「才能」を開花させるためには、我々は、その才能に見合った「人格」を、自分の中に育てていかなければならない。営業ならば、「営業人格」、企画ならば「企画人格」とも呼ぶべきものである。

では、どうすれば、我々は、自分の

中に、「必要な人格」を育てることができるのか。

そのための最も良い方法は、「私淑」をすることである。

「私淑」とは、自分が開花させたい能力や才能を持つ優れた人物を、心の中で、「この人が自分の師匠だ」と思い定め、その人物から大切な技術や心得を学ぼうとすることである。

その「私淑」によって、ある人物の能力や才能を本気で学ぼうとするならば、我々は、自然に、喋り方や仕草、雰囲気、その人物に似てくる。それは、自分の中から、その人物に似た「性格」や「人格」が引き出されてくる過程でもある。

例えば、ある出版社では、カリスマ的な編集長の下で働く若い編集者たちが、皆、その編集長と同じように、ぼつぼつと喋るようになり、仕草まで似てきたというエピソードがある。

昔から、「学ぶことは、真似ぶこと」

と言われてきたが、その本当の意味は、スキルを表面的に真似することではない。その師匠の性格や人格も含め、スキルの奥にあるものを真似しようとするのである。その修業を通じて、我々は、自分の個性を見出し、自分らしい個性的な「営業人格」や「企画人格」が育ってくるのである。

そして、昔から、分野を問わず、一流のプロフェッショナルは、自分の中に「様々な人格」を育て、それらを場面と状況に応じて、見事に使い分けている。ごく自然に「多重人格のマネジメント」とも呼ぶべき技法を身につけている。

また、世の中で「多芸多才」と呼ばれる人物も、この技法によって、「様々な才能」を開花させている。

されば、もし、我々が、この「多重人格のマネジメント」を身につけるならば、必ず、我々の中からも、「様々な才能」が開花していくだろう。

たさか・ひろし ●81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国パテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役を務める。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilメンバーに就任。11年、東日本大震災に伴い内閣官房参与を務める。13年、全国から4500名の経営者やリーダーが集い「21世紀の変革リーダー」への成長をめざす場、「田坂塾」を開塾。